進　路　選　択

大学への進路選択が受験者の明確な目的意識によってなされていれば，それが大学入学後の学習意欲をもたらすことになる点で，進路選択に関する調査は大学入試の重要課題である。これに関する昭和57年度の調査研究は約１割の大学でなされているが，従来の研究を継続している大学が多い。

調査研究の方法は，多くがアンケートによる学生の受験・大学の学習に関する意識調査であるが，一部，卒業研究指導教官のアンケート調査や面接による学生の意識調査，職業高校生の進学意識調査等もある。

調査研究結果も，多くの大学では従来と同様であるのでここでは省略することとするが，昭和57年度に新しく得られたものは次のように要約される。１大学であるが，高校の進路指導がわずかながら減少している。職業高校生の大学進学意識調査では，成績・適性・専門への興味がその大学志望の主要因となっている。また，ある大学の新入生に対するアンケート調査の昭和54～57年度の総合結果では，その大学の受験動機を「国立大学であるから」とした学生が多く，かつ年々増加している。国公立大学離れと逆行する点で注目される。次に，明確な目的意識をもって志願し，共通１次試験の成績（自己採点）を考えて志願している者が多い。そのほか，共通１次試験の科目数に負担を感じている，第２次試験の科目数と種類が第２次試験の志願に影響を与えている等，入試関係者の参考資料として検討されるべきものも含まれている。